

# 郷土の偉人「前島密」

平成十六年度の文化講演会は、「人間『前島密』を語る」と題して一月二十二日東京アルカディア市ヶ谷において、「前島密翁」の研究者前島記念館事務局長樋口嘉和さんに講演を頂きました。講演終了後は、楽しい懇親会でした。

前島密翁は郵便事業の創始者であることは伝わっておりますが、新聞事業、鉄道事業、陸運会社の創立等など多くの歴史的事業に携わっておられました。

- 一、漢字廃止の建議（慶応二年）
- 二、江戸遷都を建言（慶応四年）
- 三、鉄道創設の立案（明治三年 品川 横浜間）
- 四、郵便創業（明治四年）
- 五、新聞事業の育成（明治四年、現報知新聞）
- 六、陸運元会社の創立（明治五年、現日本通運）
- 七、海運政策の建議（明治五年、現日本

- 八、郵便為替の開始（明治八年）
- 九、郵便貯金の開始（明治八年）
- 十、訓盲院の創立（明治十二年）
- 十一、勲業博覧会の開催（明治十年、第一回博覧会）
- 十二、日本海員救済会の創立（明治十三年、海員の養成、保護救済活動）
- 十三、東京専門学校（現早稲田大学）の創立（明治十五年、現早稲田大学）
- 十四、電話の開始（明治二十三年、東京 横浜間に電話の交換業務）

前島密翁の生い立ち、足跡、とりわけ母上「てい」さんとの心の触れ合いを熱く語られました。

母上「てい」さんの言葉です。

「汝不幸生後八カ月にして父を亡び、独り母の手に依て乏しき養育を受け、茲に初めて就学の道に上らんとす。真に喜ぶ

べし。請う克く健康に克く勉勵に、師教を奉じ男子足れ。誓つて父無き者との嗤を取る莫れ」

「汝若年にしてその意を決す。何ぞこれを贊せざらん、：精神一到何事か成らざらん、一旦方針を定めて前進せんとす、何ぞ其の歩を躊躇せんや。このこと冒険不安な事なりと雖も、僻地に屈して成す無く、生きて益なきに勝る」

「この事たる我に損害無くして、正理有るを公表したれば、甚だ慶うべし、我は己に生計の見込み立ちたりば憂うなし、汝の苦難はこれ天与の大研究なり」

「男児苟も志しを立つ、死は素より恐るに足らず。唯注意すべきは長旅の健康なり。幸い母は貯蓄少し許りあれば之を餓せん」

## ふるさと上越ネットワーク 第3回文化講演会



続く懇親会では、野口家に伝わる前島翁の手紙の披露がありました。



# 人間・前島密

前島記念館事務長 樋口嘉和

前島密翁の終焉の地である、横須賀市芦名、隠居所「如々山荘」に隣接する浄土宗「浄楽寺」境内にある前島密翁夫妻の墓前において毎年、命日である四月二十七日を中心に「墓前祭」が行われてきました。

本年は、「生誕百七十年」に当たります。が、四月二十三日の土曜日、学校の周囲が満開のつつじで一杯になった葉山小学校の「つつじ祭」で賑わう快晴の葉山路に、八十人位の参会者が集まり密翁を偲びました。

さて今年、冬晴れの一月。アルカディア市ヶ谷で皆様にお会いしてからほぼ半年、あの日の事を、ついこの間のように思い出して居ります。

先日、講演の内容を中心に原稿を書くように、とのご依頼がありました。本当は話し言葉で表現すると、やわらか味が

出て良いなアと思いましたが……。

今回は、テーマである『人間・前島密を語る』の反省文めいた形になり恐縮です。



## 前島記念館のこと

最初に、『前島記念館の概要』というところで、前島記念館の設立に至るいきさつや、記念館の現況などについて触れさせて頂きました。

記念館設立の提唱者の一人である坂田増五郎さんは前島密翁の書生でした。

東京専門学校（現慶応義塾大学）の学生で、当時校長であった密翁を大変尊敬していました。

晩年、病床にあった密翁を「如々山荘」の隠宅に増田義一氏と共に見舞った際に、密翁がふと漏らした、「故郷の現況を気にかけている様子を知り、生誕記念碑の建立とあわせて、記念館設立の構想を持ったようです。

実際には、生誕記念碑は大正十一年に、前島記念館は、昭和六年に建設されますがその前、大正十五年には「前島記念池部郵便局」が坂田増五郎氏を初代局長として開局しています。

## 近代日本の黎明期と前島密について

西欧の先進的な国家体制や文化を吸収し「文明国日本」を創造した人物の一人としての『前島密』の存在は大きなポイントです。

その具体的な仕事として、近代国家の必須条件である「通信・交通の基盤」を



造り、また「教育」や「国語国字の改革」「租税」「産業育成」等の幅広い分野で「国のかたちの基本」を作り上げた事をお話しました。

## 密翁の生い立ちについて

「偉人」と言われる人の生まれ育った環境や人間関係は、ことに人格形成の上で、幼年期から青年期の在り方は大変重要で興味深いことでもあります。

特に、母「てい」さんの人間教育の素晴らしさ、前島密を「巡る人々」との関わり、「人間・密」の人生観などに触れました。ただ、母親「てい」さん、についての細かなお話しは、自叙伝から起こした「プリント」を見て頂くに止まって終いました。

実際、自叙伝には「この起る都度」

『母の言葉』として、綴ってありますが：『汝は：』と言った調子で、言葉で聞くより「目で見て頂いた」ほうが解りやすいかな、と考えた部分もありました。

幼名を「房五郎」といった七歳から十歳の間を糸魚川で過ごした少年時代、糸魚川藩医であった叔父の相沢文仲、初歩の漢方医学などを教えた同藩の医師銀林玄類、漢詩・俳諧・書・絵画などのほか、山野の自然に親しみ「年少にして少しく風流の味を解」と、手ほどきを受けた糸魚川藩目付役の竹島俊司(殺山)。茶道を習った直視院の老和尚など、人と人の触れ合いの環境があった事は、当時の少年としては大変恵まれた幸せな事だったと思われず。

### 前島密の足跡について

激動の『につぼん創成期』とも言える時代の中で活躍した、前島密翁の「主な業績」を、メインテーマとしてお伝えするところでしたが、業績などを納めたリーフ「前島密一代記」に説明の多くを譲ってしまい、中途半端になってしまっただと思っております。

「巻退蔵」という名前前で過ごした勉学時代の仕上げ段階で、長崎から鹿児島島の薩摩藩に赴き、その地における、英語教授を発端とした小姓組としての「薩摩藩士

登用」を断つてまでも、自らの信念に基づく行動を取ったこと。そして幕臣時代(駿河藩)の漢字御廃止之議、建言に見る国事国語への取り組み、江戸遷都論の建言に見る国字国語への取り組み、江戸遷都論の建言に始まる、「先見性」ある行動力。また、維新政府に入ってから約十四年間にわたり造り上げ、実現して行った様々な業績は、まさに目を見張るものがあります。

### 人間「前島密」の魅力は何でしょう

前島密の人となりは「：忠実で、果敢で、廉潔で、趣味は博かった」と、生誕記念碑の碑文にあります。原文は会津八一、坪内逍遙が監修し、市島春城が撰文しました。

先見性に基づく大局を論じ、卓越した経験抱負の持主で同時に多面的な対応のできる人であった。清廉潔白な政治家かと思えば、大商人ともいえるような経済感覚も持ち合わせた人であった。と言われています。

